

「安全な場」つくり幸せに

軽井沢病院 稲葉医師(熊本市出身)が講演



医療や芸術の視点から「いのち」について語る稲葉俊郎医師
＝熊本市中央区

医療や芸術などさまざまな分野で「いのち」と向き合う軽井沢病院(長野県)の稲葉俊郎院長(44)＝熊本市出身＝の講演会が2月17日、熊本市中央区の市医師会館であった。人間が幸福で健康に暮らすための「安全な場」の重要性について、独自の視点で語った。

市医師会員の家族らでつくる同会婦人会が研修会として企画。「いのちの居場所をめぐって」と題し、会場とオンラインで計約80人が聴いた。

稲葉医師は、人々が無意識に作り出す空間「場」と「個」が共存

する難しさを指摘。「私たちは国家や職場、家族などいろいろな場は無意識に適応しているが、過剰適応すると何が幸せか分からなくなる」。その上で「大切なのは、自分の発言が肯定されるという場の心理的安全性を保つことだ。個と場が共に尊重される『安全な場』では、仕事や教育で本当の力が発揮できる」とした。

具体例として、長野県軽井沢町で医療と福祉、芸術が連携してお薬手帳を制作するプロジェクトなどを紹介。障害者や高齢者とデザイナーが共同で手帳に絵を描いて販売し、対等な関係になれる場をつくっているという。「個と場の利害をつなぐのが対話だ。芸術は、感受性の違いから対話を巻き起こることができる重要な役割を担っている」と語った。(前田晃志)